

業界の巨人今や亡し 菅原恒覽翁を憶ふ

業界の巨人菅原恒覽翁の逝去こそ、まことに悟りきつた天國への大往生であつた。82歳の高齡を以て3月22日迄会社へ出勤し、平常と變らぬ落付いた態度で後事を談じ、特に翁が理事長たる土木工業協會の事業に對しては多大の關心を持ち、一切の後事を托する意味を以て退任の辭を録音までされてゐた。

責任感の強い翁は老齡を以て尙ほよく鐵道工業株式會社取締役會長としての日課を果し、一方には社團法人士木工業協會理事長として熱心なる指導を怠らなかつた。其人格徳望に於て將に業界の大先覺者であつた。4月10日溘焉として逝去するや各方面から深甚なる敬慕哀悼の意を表せられ、會社からは社葬を以て、土木工業協會からは協會葬を以てせん事を申出たが、翁の遺志により其一切を辭退せられ、告別式も、香奠も、花環も堅く辭退して僅かに近親者のみで嚴肅な葬儀が行はれた。

○

菅原翁の人物に就ての逸話は甚だ多いのであるが、少年時代から餘程の秀才であつて、同郷の俊才後藤新平伯や、齋藤實大將などと俱に登米縣廳の給仕として苦學の第1歩を踏出した人で、當時「菅原豪覽」の異名を以て呼ばれた如く剛毅不屈の性格が傳へられてゐる。然るに後藤伯は醫師から大政治家となり、齋藤子は海軍大將から首相となり、兩氏とも新興日本の大なる礎石となつたが、3少年給仕の中の1人たる菅原翁が何等名聲を求めず、孜孜として土木事業の爲に其一生を捧げた事は又感慨無量のものであつたらうと思はれる。

菅原翁は平生最も讀書を好み、中でも佛書に親み特に親鸞の研究には一家をなしてゐた。尙ほ菅公に就ての研究も進め、其等に關する著述もあつた。其他の趣味としては茶の湯、和歌があり、此等は何れも日本趣味の風格の中に不動の信念に満ちた翁の溫容が窺はれるものである。

翁が母堂に對する孝養は至れり盡せりで、其美談も多く傳へられてゐる。

○

事業に對する翁の指導方針は責任第一主義で、一身上の利害を超越して工事の完成を期するのの有様であつた、従つて鐵道工業會社に於ても翁の指導精神が一種の社風をなしてゐるのも當然である。

翁の家は一ノ關の藩士であつたが、少年時代より苦學力行を以て向學に志し、仙臺英學院、東京の津田農學校を経て後に工部大學に入り、明治19年優秀の成績を以て卒業した。

翁の關係事業としては、甲武鐵道建設を初め、東北本線の建設に従事し、其間歐米の鐵道工事を視察した、青梅鐵道會社の技師長を終りとして、菅原工務所を創立し、後に古川久吉、星野鏡三郎氏等と鐵道工事請負業に従事したのが今日の鐵道工業株式會社の創始である。當時原口要氏より支那の粵漢鐵道工事を日本の技術を以て建設する事が國策的に必要なりと主唱され日本を代表する鐵道請負業者として以上3氏の協力創業となつたものである。

當時の關係者何れも故人となり、翁一人が生存して、然も死の最後まで日本の土木業界の爲に全力を盡した事はまことに偉大な功績と云ふべきである。



退任の辭を録音中の
菅原恒覽翁

東京帝大から紀元2600年記念事業の發起人の一人となる事を依頼された菅原翁は、直に之を快諾して先づ寄附金1千圓を、土木工業協會の瀧山常任理事に托した。發起人を依頼された丈で、寄附金の事には未だ進んでゐなかつた際であるが、翁は既に自分の死期を悟り此舉に出たものである。